■東日本大震災から 13 年後の現実

１０月８日～９日　大阪府生協連合会主催の福島県視察研修に行ってきました。ニュースでは伝えてくれない福島の復興の現実、福島県民の想いを共有させていただきます。

2011 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分

東北地方太平洋沖地震が発生しました。

被災地では未だ約 3 万人を超える人々が避難生活をされています。その内の約 9 割が原発事故の被害を受けた福島県の避難者です。

福島第一原子力発電所周辺の地域では、13 年経った今でも帰宅困難区域で故郷に帰りたくても帰れていない現状です。

津波に流された民家や大木が、そのまま手付かずの状態で残っていたり、13 年前の洗濯物が干されたままだったり、当たり前に過ごしていた日常が一瞬にして奪われました。

「これから福島をもっと宣伝して、あの寂しい土地がたくさんの建物であふれて、にぎやかになっていってほしい」

「福島に住む私たちは、当たり前の毎日が、明日も来ることではないと知っている」

「震災・原発事故で苦しんでいる人たちの思いを自分事として受け止め、寄り添ってほしい」というのが福島県民の想いです。

「もし自分が 13 年間避難生活せざるを得ない状況になったら？」

「もし自分の故郷が立ち入り禁止区域になったら？」

皆さんもご家族やご友人と一緒に考えてみてください。

〇福島第一原発 1 号機

放射線量の影響で一日 3 時間の作業

一日 4 千人が復興作業している

〇全生徒・全職員が助かった奇跡の小学校

3 月 11 日は卒業式だった

新たな門出を祝った直後に…

《 研修・視察に参加して 》

〇今回の研修に行くまでは「13 年も経っていれば復興もかなり進んで元の生活に戻れているのだろう」と甘い考えでいましたが、現場を視察すると「いまも帰宅困難者や苦しんでいる方がいて、今から 30 年後でも復興できているかどうか分からない状況なんだ」と福島の現実を知ることができました。

福島原発では、汚染水（ALPS 処理水）の海洋放出問題や、原子炉内の核燃料が溶けて冷え固まった燃料デブリの取り出し問題、放射性物質に汚染された廃棄物の埋立処分問題 、、、様々な問題を抱えていると学びました。

大阪に住んでいると偏ったメディアの情報しか入ってこないので、自ら福島の復興に関心を待ち、調べて、伝えて、風化させないことが大切だと感じました。【共同購入センター I 職員】

〇東日本大震災から 13 年が経ちましたが、まだまだ復興は道半ばだと感じました。街の中には、洗濯物が干したままの住居があり、13 年前に避難をしてから一度も自宅に戻って来られていない、時が止まったままの場所も所々にありました。

東日本大震災のことは、ニュースなどの映像でしか見ていなかったが、実際に現地に行くことで、震災の悲惨な状況や現在の復興状況などを自分の目で見ることができました。

今は石川県能登半島の災害に目を向けられがちですが、13 年前の東日本大震災で起きた、地震、津波、原発事故の復興もまだまだ終わりは見えないこと、その事を風化させず、これから起こるであろう南海トラフなどの防災や減災に活かしていけるよう、自分の身の回り人に発信していく事が大切だと感じました。【共同購入センター K 職員】

〇この二日間、原発について学び、東日本大震災の天災と人災の複合的災害によって起きた事実にふれることができました。自然の驚異、そして、人間の生活をより良きものにするための電力を生み出す装置が原発で良いのだろうか？と何度も考えました。

この地で起きたことを伝えるためにたくさんの悲しみの事実が遺されていました。また、バス移動中に福島県生協連会長より「東日本・津波・原発事故大震災から 13 年半」と題して当時の事故の状況や処理水が起こす漁業関係者の心の痛みなど、学ばせていただきました。13 年が過ぎても終わらない被災地の今を目の前にして、忘れかけていたことに反省の思いでいっぱいになり、忘れてはいけないと強く感じました。

その場所に立つことで、感じる恐怖や悲しみを今回改めて受け止める機会となり、これから何ができるのか、そして今回の体験を広く伝えていきたいと思いました。【T 理事】